

戦争言説と近代文学に関する一考察

—太宰治「十二月八日」を事例として—

何 資宜

1. 研究目的

昭和の戦争の時代は1931年の満州事変に始まり、1937年の日中戦争で本格化し、1941年の太平洋戦争で国家総力戦となり、1945年の敗戦によって終わったが、文壇に戦争が登場するのは日中戦争の時からである¹。

1937年7月の日中戦争を境に、「出版社や新聞社などジャーナリズム界は、文学者を戦地に派遣し、現地の見聞記や報告文などを書かせ、各誌・紙上で戦地のルポルタージュで飾り立てた²」という。さらに1938年8月、情報局は文学者を従軍させる企画を発表し、菊池寛（当時文芸協会会長・文芸春秋社代表）の関与で、22名の文学者が選出された。これが世にいう「ペン部隊」であったが、その後、戦況がさらに深刻化し、ついに1941年、太平洋戦争勃発の直前には、「文士徴用」によってのべ70人余りの文学者が陸海軍の報道班員として「徴用」され、日本軍が統治した南洋・南方の各方面に送られた。

徴用された従軍作家は、現在の東南アジアを中心とした各地での「南方作戦」に従事し、軍が統治した地域での宣撫・宣伝活動が主な任務であったが、現地での任務を終えての帰還後も、戦地での体験や見聞を雑誌・新聞などに発表し、遠い戦場における「皇軍」の勇敢なる戦いの実状を銃後に伝えようとするのである³。そして、「彼ら従軍作家たちが書いた前線部隊からの戦争の記録と報告と感想は、ある意味での戦争下の戦争文学の方向とジャンルをシンボライズするものとして、当時の紙誌に残されている⁴」が、「〈銃後〉については、せいぜい副次的にしか題材とされなかった⁵」という。

その反映なのか、戦争文学の研究史を辿ってみると、そのほとんどは中国（満洲）、台湾、朝鮮、沖縄を拠点とする〈植民地文学〉に重きを置いていることが分かる。だが、周知のように、近代の戦争の特徴は総力戦（total war）

にある。事実、1931年9月の満州事変から、1945年8月の太平洋戦争終結までの間における流行語やスローガンをあげただけでも、〈銃後〉の統制の強化が理解できる。とりわけ、太平洋戦争開戦とともに、情報局による文化統制・思想検閲がさらに深刻化し、ついに1942年6月に、「日本文学報国会」が正式に発会し、「文学者の戦争協力システムが形式化され⁶」たのである。こうした実情を踏まえ、〈戦争〉の実体を明確にするためにも、戦場だけではなく、国民の思想・民衆ナショナリズムを陰で操る〈銃後の風景〉もクローズアップしてみるべきではないか。

〈戦争〉がもたらしたものは、戦場での戦闘行為の激烈さや、植民地における統治・宣伝活動だけにあつたのではない。〈銃後〉の思想検閲による民衆の狂気が、恐ろしい一つの時代環境を形作っていることも見逃してはならないことである。マスメディアによって、「挙国一致」・「一億一心」という熱狂的な〈共同幻想〉⁷が広がる一方、戦時下に置かれた銃後の文学者たちは、〈国策文学〉に迎合するか、筆を折って終始沈黙を守るか、という二者択一を迫られていたのである。彼らのうちには、筆一本で一家を養っていく〈職業作家〉もいるが、時代環境と家庭の生計の板挟みとなった彼らは、果たして厳しい国家権力・民衆ナショナリズムにどんな姿勢で挑み、表現の可能性にどのように挑戦しようとしたのか。本発表はこれらの疑問を出発点として、近代における戦争文学の一側面の解明を目的とする。

2. 太宰治「十二月八日」

シンポジウムで取り上げた太宰治は、その15年間の創作活動がほぼこのアジア・太平洋戦争と重なり合っていたため、こうした「文士徴用」をめぐる一連の騒動の中に巻き込まれた。だが、ほかの文学者と違うところはといえば、太宰治は生涯を通じて、兵役と関わりがなく、従軍体験もなかったということである。「文士徴用令書」は受け取ったが、身体検査の際「肺浸潤」という病名で免除され、「徴用失格」者として〈銃後〉に取り残されたのである。いわば、太宰治は当時には数少ない〈銃後作家〉、かつ戦争の中を書き継いでいった〈職業作家〉という二重の立場に置かれた文学者であった。

従軍は免れたが、銃後の文壇も戦争に影響され、情報局の検閲などによって厳しい事態に立ち至っている。ちょうどこの厳しい時期に立ち会った太宰は、太平洋戦争開戦という全国民を巻き込んだ軍部の一大イベントに対し、「十二月八日」(『婦人公論』昭和17.2)という作品を世に送った。

こうした状況を背景にして生まれた「十二月八日」への評価は、当然のように〈作家太宰治〉の戦時下スタンスを問う形でなされているものが多い。だが、この作品を guilty or not guilty (戦争に加担したか否か) という二分法で裁く場合、「いまだに抵抗か迎合かに分かれている感がある⁸⁾」という結果が生じる。太宰の〈迎合的姿勢〉を指摘した論説は、「生真面目に開戦の日の興奮を綴った「私」に焦点を置く傾向があり、この作品を「太宰の昂ぶりを素直に書きとめた戦争小説⁹⁾ (傍点筆者。以下同様) として定義する。一方、〈芸術的抵抗〉を評価する論説は、「不精」な「小説家」に注目し、その滑稽な言動に「戦争体制からはみ出した作家自身¹⁰⁾」の姿を見出し、「ここに登場する太宰の姿はユーモラスでむしろ諷刺的でもある¹¹⁾」と説く。このように、登場人物のどちらに〈太宰治〉をあてはめるかによって、作品への評価が変わってくるのが分かる¹²⁾。

しかし、いわゆる〈銃後作家〉の戦時下作品を迎合・抵抗という両極で語るのはいかにも片手落ちであり、とりわけ、〈読者意識〉・〈方法意識〉の強い太宰治の作品を検証する場合、テキスト解釈と作家の有り様への理解が循環論に陥ってしまう懸念が生じるのである。おそらく、そのような演繹的な論じ方こそが、「いまだに抵抗か迎合かに分かれている観がある」という結果を招いたのではないかと思われる。

本発表は、まず作品から〈作家太宰治〉をいったん切り離し、物語内における「私」の人物像とその言説との矛盾を指摘しつつ、同時代における〈十二月八日言説〉との接点を提示する。そして作中に登場する「小説家」と〈作家太宰治〉との距離を究明し、最終的には「十二月八日」というテキストが抵抗とも迎合とも読まれうる構造を明らかにする。

3. 結び

本発表における詳しい検証は改めて論文にまとめるが、結論からいうと、この作品には当時メディアに氾濫した〈十二月八日言説〉の反映という「記録」的要素があり、一方で、その登場人物の造形によって、読者には作者の生身を想起させる装置も見られる。「まじめ」そうに同時代言説を語っている「私」にまとわされれば、必然的にこの作品を「典型的な戦争文学」として読んでしまうのだが、一方、「小説家」＝〈太宰治〉という装置にはめられた読者は、「不精」な「小説家」の言動に〈作家太宰治〉の〈芸術的抵抗〉を見出そうとする。このように、同じ前提のもとに行われる二つの異なる解釈の存在は、戦時下の〈太宰治〉としての成功を示すものだとも言えるだろう。

〈一億一心〉を強いられた銃後作家たちは、ある者は時局に順応（または便乗）して〈お時儀をする〉が、ある者は目をつぶって〈終始沈黙を守る〉ことにした。しかし、この二者択一の道に屈しない者は、当時の軍部が文学者に強要した〈戦時見聞記〉を逆手にとって変形しつつ、読者の読みの慣習である〈私小説的な読み〉をも逆用する、という形で独自の表現を形づくっていた。こうした〈変形された記録文学〉、なおかつ〈変形された私小説〉は、まさに日本の戦時下文学における新しい表現方法ではないかと思われる。

*本稿は、12月13日に開催されたアジア社会文化研究会シンポジウムにおける発表要旨であり、あらためて完成原稿を発表予定です。

註

¹ 昭和六年の満州事変勃発とともに、「新聞は号外合戦を演じて戦況を伝え、「満州は日本の生命線」という国策を支持して世論を喚起したが、論壇はむしろ時局に批判的であり、文壇は満州事変の推移と動向にはほとんど無関心だった」という。しかし、昭和十二年七月、北京郊外の盧溝橋で起きた日中両軍の軍事衝突は、時局を一変させ世論の動向を変えたのである。「盧溝橋事件」以来、国家・国民あげての戦争支持体制が形成されたが、こうした国民

精神総動員運動は、すべての国民、地域の末端に至るまで運動に巻き込み、いわゆる知識人や文化人も例外ではありえなかったという。詳しくは、都築久義「従軍作家の言説」(『時代別 日本文学史事典現代編』有精堂、1997.6)を参照。

² 木村一信「大東亜共栄圏と文学者」(『時代別 日本文学史事典現代編』有精堂、1997.6)165頁。

³ 詳しくは、前掲木村一信及び永野悟「ルポルターージュと小説」(『新批評・近代日本文学の構造 ⑥近代戦争文学』国書刊行会、1981.12)を参照。

⁴ 有山大五「作者の戦争体験と文学」(『新批評・近代日本文学の構造 ⑥近代戦争文学』国書刊行会、1981.12)27頁。

⁵ 馬渡憲三郎「銃後」(『新批評・近代日本文学の構造 ⑥近代戦争文学』国書刊行会、1981.12)88頁。

⁶ 栗坪良樹「作家の従軍と徴用」(『近代文壇事件史』学燈社、1990.10)138頁。

⁷ 奥出健『太宰治全作品研究事典』(勉誠社、1995.1)155頁。

⁸ 注7に同じ、125頁。

⁹ 赤木孝之「太宰治と戦争(Ⅰ)」(『戦時下の太宰治』武蔵野書房、1994.8)35頁。

¹⁰ 相馬正一「戦時下の創作活動」(『評伝太宰治 下巻』津軽書房、1995.2)236頁。

¹¹ 奥野健男「「新郎」から「佳日」まで—中期Ⅲ」(『太宰治』芸芸春秋、1973.3)201頁。

¹² 近年では、作品の〈両義性〉・〈多義性〉を説く傾向も目立つようになったが、管見の限り、「外部・他者への開かれ方、多様な時間軸、そして“日常”における“戦争”の表象の方法」を論じた松本和也「小説表象としての“十二月八日”—太宰治「十二月八日」論一」(『日本文学』2004.9)を除けば、そのほとんどが〈政治と文学〉という枠組みの下に置かれた文学者の、戦時下活動の限界を提示するものであり、議論の帰結が太宰その人の戦時下スタンスに還元する傾向は依然として強い。

(innateho@yahoo.co.jp)